

516

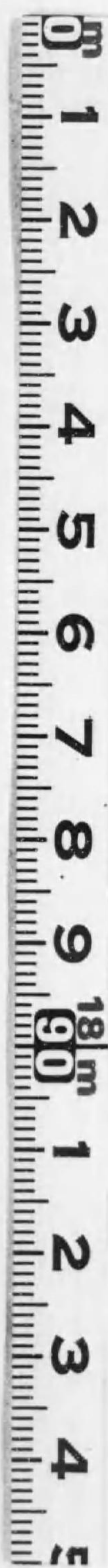
241

事故本

書系込

P27

1992.5.28.



始



9.2.13

1913



民謠百篇



516-241

民謡は民族が有する唯一の郷土詩である。郷土詩を無視して民謡の存在はない。民謡は草土の詩人によつてうたはれる、純情藝術である。

本書に「かれくさ」(明治三十八年發行)以後の小著中より採録した作品と未發表の作品とを加へて百篇としたが必ずしも自選集の意味ではない、自分が二十數年間辿つて來な道程の記録である。

又、一二節外律によらざる作品も加へたのは思ふところがあつたからである。

大正十三年六月

著者

目次

紅殻とんぼ	二
橋の上	四
捨てた葱	六
二十三夜	八
門司にて	一〇
竹藪	一三
よいとまけの唄	一三
夜あけ星	一六
眼子菜	一八

朝霧	.....	二〇
青いすすき	.....	二二
粉屋念佛	.....	二四
波浮の港	.....	二五
海の遠く	.....	二八
洪水の跡	.....	三〇
謎	.....	三三
はぐれ鳥	.....	三四
窓	.....	三六
日永	.....	三八

お茶師	.....	四〇
大洗沖	.....	四二
草刈り娘	.....	四四
金雀枝	.....	四六
風の音	.....	四八
畑ン中	.....	五〇
道楽薬師	.....	五七
蚊喰鳥	.....	六〇
また来よつばめ	.....	六三
千代の松原	.....	六四

背戸山	六
飛驒にて	六
米山小唄	七〇
旅の身ぢやとて	七二
小諸小唄(二章)	七四
出船	七六
浪枕	七八
川しぶき	八〇
芙蓉の花	八二
いとどの蟲	八四

千羽烏	八六
薔薇の花さへ	八八
わたしや黒猫	九二
同じ國なら	九六
暴風の夜	九八
但馬山國	一〇〇
春降る雪	一〇二
伊那の龍丘	一〇四
霧ヶ岳から	一〇六
かなしい海	一〇八

茄子畑……………110  
 運動踊り(四季の歌)……………111  
 宮城野小唄(二章)……………116  
 つばくらめ……………118  
 お艶……………121  
 旅の鳥……………123  
 篠藪……………124  
 萱の花……………128  
 みそささい……………130  
 風に吹かれて……………131

荒野……………135  
 子安貝……………137  
 一軒家……………139  
 白露蟲……………141  
 雁……………144  
 濡れ乙鳥……………146  
 空飛ぶ鳥……………148  
 枯れ山唄……………150  
 土蔵の壁……………151  
 儂き日……………154



祇園町	一五六
お糸	一五八
霜枯れ	一六〇
螢草	一六二
小室の小笹	一六五
芒の葉	一六六
戀の日	一六九
西瓜畑	一七二
旅で暮らせば	一七四
沙の敷	一七六

昔の月	一七八
歸らぬ人	一八〇
片戀	一八三
煙草の花	一八四
石地蔵	一八六
櫛	一八八
葛飾の夏	一九〇
港の時雨	一九四
蘆枯れ唄	一九七
おけらの唄	一九九



雨情民謠百篇

表紙畫	小川芋錢
娘と劉さん	二八
聽	二六
釜山にて	二四
女工唄	二〇
おけら	一八
スイッチョ	一六
夕の月	一四
錆	一〇
翹	〇〇

紅殻とんぼ

とんぼ来るかなと

裏へ出て見たりや

とんぼ飛んで来て

釣瓶にとまる

とんぼ可愛や

紅殻とんぼ

赤い帯なぞちよんと

縮めて来る

橋の上

橋の上から  
小石を投げた

小石が浮くかと  
川下見たりや

小石を洗んで

流れてく

捨てた葱

葱を捨てたりや  
しをれて枯れた

捨てりや葱でも  
しをれて枯れる

お天道さま見て

俺泣いた

二十三夜

二十三夜さま

まだのぼらない

麥鍋ア圍爐裡で

泡立つてる

とろく　とろりちけえ

眠くなつて来た

門司にて

門司へ渡れば  
九州の土よ

土の色さへ

おぼろ月夜してる

土もあかるい

あかるい土よ

人もあかるい

あかるい顔よ

遠い常陸は

わたしの故郷

なぜに暗いだろ

故郷の土よ

暗い土でも  
常陸は戀し

竹  
藪

背戸の竹藪で  
竹伐つてゐたりや

雀や飛んで来て  
啼いてからまつた



よいとまけの唄（掛合唄）

音頭とり「よいとまきすりや

綱引き「この日の永さ

音頭とり「たのみましたぞ

綱引き「音頭とりさんよ

音頭とり「唄が切れたら

綱引き「唄續ぎやしやんせ

音頭とり「寝てて暮らそと

綱引き「思ふちやゐぬが

音頭とり「枕の長さよ

綱引き「お天道さまよ

音頭とり「唄で引かなきや

綱引き「どんと手に來ない

夜あけ星

夜明お星さま  
一つかや

宵に出た星ヤ  
どこへいつた

天さのぼつたか

潜つたか

眼子菜

蛙鳴くから

沼へいつて見たりや

沼にや眼子菜の

花盛り

沼にや眼子菜の

花盛り

蛙ア眼子菜の

蔭で鳴く

朝霧

夜あけ千鳥ちや  
あの啼くこゑは

歸りなされよ  
お歸りなされ、

川の浅瀬にや

朝霧立ちやる

霧は浅瀬の  
瀬に立ちやる

青いすすき

青いすすきに

螢の蟲は

夜の細道 夜の細道 通て來る

細いすすきの

姿が可愛ネ

細い姿に

こがれた螢ネ

夏の短い

夜は明やすい

夜明頃まで 夜明頃まで 通て來る

粉屋念佛

「粉屋念佛」踊る子は  
歸る

若い娘は

まだ歸らない

スタコラサ

スタコラサ

月も夜明にや  
山端へ歸る

寝ぼけ月なら  
歸らない

スタコラサ

スタコラサ

波浮の港

一 磯の鶉の鳥ヤ

日暮れに歸る

波浮の港にや

夕焼け小焼け

明日の日和は

二 船もせかれりや  
出船の仕度

ヤレ ホンニサ 風るやら

島の娘達ヤ

御陣家暮し

なじよな心で

ヤレ ホンニサ ゐるのやら

三、ふみさきすりやとほしうてたぐぬ  
伊三の伊奈とは 郵便たより  
下田港へは  
やしあふニサ 風たより

四、風は潮に 伊神火流  
島う娘下すや 出船のこま

船ういゝつた  
やしあふニサ 泣いてくはし

五、磯う鶉う鳥や 沖かゝ磯へ  
送る送るや 舟船えに  
明日より 舟  
やしあふニサ たより

海の遠く

海の遠くの離れた島で

かはい小鳥がうたふ歌聞ゆ

海の遠くを毎日見ても

島も見えない小鳥もゐない

島は見えずも小鳥はゐずも

かはい小鳥がうたふ歌聞ゆ

誰も知らない遠くの島で

かはい小鳥がかはい歌うたふ



洪水の跡

洪水の跡に  
コスモス咲き

赤い蜻蛉が  
とまつてゐる

赤い蜻蛉よ

旅人は  
どこまで行つた

謎

わたしや恥かし  
喜藏さんの謎が

枝垂柳の謎ばかり  
かける

解けと言ふたとて

解かりよか 謎よ

これさ 喜藏さん  
かけずにおくれ

はぐれ鳥

鳥トリ啼なくから  
出でてみりやゐない  
お母お母さんよ

わたしや鳥トリに  
だまされた  
だまされた

はぐれ鳥トリだ  
だました鳥トリ  
お母お母さんよ

鳥トリア啼ないても  
もう出でない  
もう出でない

窓

夜よになるとお月つきさんは  
窓まどに來た

そーツと窓まどから  
覗のぞいてる

お月つきさんは しばらく

來きなくなつた

闇やみ夜の夜よばかり  
續ついてる

今け朝あ見みりやお月つきさんは  
ぼツと出でてた

有あ明あお月つきさんに  
なつてゐる

日 永

土つちに物もの問とうた  
畑はたけの土つちに

土つちが物もの言いうた  
畑はたけの土つちが

日ひ南なたぼつこして

わたよと言いふた

お茶師

木瓜の花咲く  
日和は續く

お茶師や來るのも  
もう間はなかる

裏の畑の

茶の樹を見たりや

雀アならんで  
とまつてる

大洗沖

鹿島灘越しや  
船玉さまよ

アレサ マア  
大洗沖の  
アレサ マア

隠れ御礁の  
磯が鳴る

草刈り娘

わたしや田舎の  
草刈り娘

草は千駄

刈らなきやならぬ

ザツクリ ザツクリ

草の千駄  
夜明の星

ザツクリサ

わたしや思はぬ  
日とてない

ザツクリ ザツクリ  
ザツクリサ



金雀枝

金雀枝の花咲く頃は  
ほととぎすが啼く  
ほととぎすが啼く

故郷の森の中にも  
もう金雀枝の  
花咲く頃か

ほととぎすが啼く  
ほととぎすが啼く

風の音

一

裏戸覗きやる  
口笛ヤ吹きやる

わたしや氣が氣ぢや  
ゐられない

逢へる身ならば  
逢ひにも出よが

元のわたしの  
身ではない

二

戸縁叩きやる  
小聲ぢや呼びやる

とても気が氣ぢや  
ゐられない

空の星でも  
縁なきや流る

薄い縁だと  
おぼしやんせ

三

石は投げしやる  
雨戸にやあたる

もうも気が氣ぢや  
ゐられない

この家去れとて  
石投げしやるか

石に言はせに

來きやしやるか

四

去きつちやくれろと  
石いし投なぎやしな

風かぜの音ねだと  
思おもやしやれ

風かぜの音ねだと  
よよく言いふてくれた

窓まどにもたれて  
泣ないたぞえ

# 畑 ン 中

(ある農夫の歌の VARIATION)

晝眞間ちつまへでどわせう

畑はたけン中なかに、田鼠しんねが一匹ひき

斑犬まだぬに掘ほりぞへられて

イヤハヤ

むんぐらむんぐら居ゐやあした

畑はたけの土つちは、開闢かいびやくこのかた、黒くろいもんか

どなもんか

眞まことの所ところ、鳥からすに聞きいて見みやあすべい

畑はたけン中なかは、青空あおぞら天上てんじやう、不思議ふしぎはどわすめえ

喉笛のどぶえ鳴ならした ケー ケー ケー

鶏かしはが走はしつた

こりやまた事ことだと魂消拂たまけつて見みてやあした。

蜻蛉あひづが一匹ひき

追おっかけ廻まつた、啄つくわ 啄つくわ

ぶつ飛とびあがつた、飛とんだわ 飛とんだわ

蜻蛉あひづは御運ごうんでござりあした

地主様の一人娘が  
娘に二種何處にござせう  
どどの詰りが

エヘン

孕み女子になりやあした  
畑中の豆の花何なもんだ  
朝つばらから何事ぶたすに  
べろりと咲いてござりやあす

### 道楽薬師

願ひかけました  
米山さまへ

縁をつないで  
お呉れよとかけた

末はどうでも

お薬師さまよ

せつば詰つた  
つないでお呉れ

帯で結んでも  
切れる縁は切れる

どうせ米山も  
お道楽薬師

切れるまでにも  
つないでお呉れ

蚊喰鳥

春も末かよ

葉櫻の

蔭に來てゐる

蚊喰鳥

友なつかしい

今日の日も

櫻の蔭に  
暮れて行く

櫻の蔭の

たそがれが

なぜなつかしい

蚊喰鳥



また來よつばめ

月日立つのは

つばめの鳥よ

はやいものだ

さう思へ

南風吹きや

また來よつばめ

櫻咲いたら

來よつばめ

南風吹きや

つばめの鳥よ

わしが待つぞと

さう思へ

千代の松原

千代の松原

ひよろく松よ

こぼれ松葉の

わたしちやほどに

逢ひに來たのか

泣かせに來たか

逢ひに來たなら  
出て逢ひませうに

泣けと云ふなら  
わしや泣きませうに

唄で流して  
横丁を通る

背戸山

狐きつねや背戸山せとやまさ

來きちやコンと啼ないた

背戸せとの松山まつやまの

松伐まつきりつてしもと

狐きつねや背戸山せとやまさ

來きなくなつた

飛驒にて

山にや

毎日 寒い風吹くに

飛驒の高山

渡り鳥や

渡る

渡りなされよ

富山の山にや  
風は吹いても  
まだ雪や  
降らぬ

米山小唄

思ひつめたぞ

米山さまよ

生きて暮らそと

戀路で死のと

わしの心も

こうなりや聞ぢや

どこで照る日も

照る日は同じ

故郷も捨てたぞ

この土地去るぞ

旅の身ぢやとて

旅の身ぢやとて

さうぢやとて

明日はわかれて

ゆく気かい

たづねて來よとて

さうぢやとて

このままわかれて

ゆく気かい

待つてて呉れとて

さうぢやとて

どうでもわかれて

ゆく気かい

小諸小唄

□

上州見おろし

浅間が山は

胸にほのほの

火を燃やす

□

二つ日はない

□

浅間が山よ

わしが願ひを

どうなさる

出船

沖は時雨よ

渚は雨よ

船は出船か

みち汐か

汐はみち汐

港の船よ

時雨交りの

風が吹く



浪枕

昨夜も君から  
来たたより

博多小女郎は  
浪枕

わたしも博多の

浪枕

ゆるしてお呉れと  
いふたより

川しぶき

さつさ行きましよ

あの山越えて

花は咲けども

ふるさとの

月はおぼろに

川しぶき

さつさ行きましよ

あの川越えて

花は散れども

ふるさとの

月はなつかし

川しぶき

芙蓉の花

芙蓉の花の  
咲く頃にや

芙蓉の紅い  
花が咲く

雀もお宿に

歸る頃にや

雀のお宿も  
日が暮れる

おれもかうして  
ゐるうちにや

おれも日暮れて  
しまふだらう

いとどの蟲

青い月夜だ

いとどの蟲よ

河原蓬は

末から枯れる

青い月夜も

いつまで続く

鳴いてくれるな

いとどの蟲よ

千羽鳥

生れ故郷の

父母さまよ

今日もわたしは

米とりながら

父と云ひました

母と云ひました

千羽鳥の

カホく聲よ

父が戀しい

母なつかしい

薔薇の花さへ

一

薔薇の花さへ

真赤に咲くに

二度と歸らぬ

わかれた戀よ

夢か 涙か

流れの水か  
わたしや口惜い  
捨てたか戀よ

二

薔薇の花さへ

真赤に咲くに

歸つて下さい

わかれた戀よ

夢も 涙も

流れの水も

わたしや口惜い

歸らぬ戀よ

三

薔薇の花さへ

眞赤に咲くに

忘れられない

せつない戀よ

夢と 涙と

浮世の風に

わたしや口惜い

しぼんだ戀よ

わたしや黒猫

一

わたしや黒猫

闇夜がすきよ

寒いロシアへ

渡ろか 行こか

行こかロシアの

雪降る國へ

身まで賣られた

わたしや黒猫よ

二

風は 吹く吹く

港の沖に

寒いロシアの



國吹く風よ

行こよ明日は

ロシアの國へ

どうせ賣られた

わしや黒猫よ

三

鳥は空飛ぶ

空飛ぶ鳥よ

つれて行かぬか

ロシアの國へ

ロシアは戀しい

火を吐く國か

たよりすくない

わしや黒猫よ

同じ國なら

同じ國なら

故郷の人か

聞いただけでも

なつかしう思ふ

今の  
今まで

忘れてゐたが

村の娘で

わしやゐた頃よ

思ひ出したぞ

涙の種を

# 暴風の夜

飲めよ コクテール  
うたへよ 未来の歌を

赤く爛れた

二人のころ

弾こか パラライカ

ロシヤの歌を

空は闇夜で

星さへ見えす

窓を ノックする

暴風よ 雨よ

明日の夜明が  
またれてならぬ

但馬山國

但馬山國

三日月さまも

山の蔭から

蔭へとはいる

山の蔭かよ

三日月さまは

但馬山國  
戀の星月夜

春降る雪

何にか 不思議だ  
春降る雪は ヨー

山の峰さへ  
一夜で解ける

わしの扱帯も

春降る雪か ヨー

伊那に來た夜に  
不思議に解けた

伊那の龍丘

伊那の龍丘

桃の花盛り

春蠶掃きませうか

籠ロチ乾そか

春蠶毛子になつた

日和はよいし

簇たたいて

桑摘み唄よ

霧ヶ岳から

霧ヶ岳から

朝立つ霧よ

霧を見てさへ

父母さまを

思ひ出されて

どうもならぬ

故郷戀しい

あの山蔭の

霧は消えても

父母さまを

思ひ出されて

どうもならぬ

かなしい海

さんぶくと

越後の海は

戀の海かよ

海鴨よ

はなれくに

波々打つな

同じ海でも

越後の海は

さんぶくと

かなしい海か

はなれくに

波々打つな



茄子畑

茄子なすびやうれたかと  
畑はたけを覗のぞきや

茄子なすびやうれずに  
まだ花はな盛さかり

ひよいと茄子なすびの

木きの下見したみたりや

蟻ありの行列ぎやうぎア  
續つづいてる

運動踊り (四季の歌)

春

春の花かよ

櫻の花は

春の花だよ

あの花は

チャ／＼ラチャ ヤットサ

夏

夏の空かよ

夕立雲は

夏の空だよ

あの雲は

チャ／＼ラチャ ヤットサ

秋

秋あきの月つきかよ

尾花おはなの上うへに

秋あきの月つきだよ

ああの月つきは

チヤ／＼ラチヤ ヤツトサ

冬

冬ふゆの風かぜかよ

山やま吹ふく風かぜは

冬ふゆの風かぜだよ

ああの風かぜは

チヤ／＼ラチヤ ヤツトサ

宮城野小唄

□  
さんさ時雨は

夜來ちや

降りやる

萱の枯れ穂に來ちや

降りやる

□

鹽の鹽釜

石の釜

欲しや

鐵の鑄釜ちや

鹽アたけぬ

つばくらめ

濱町へ 来て幾年になるだらう  
物干臺の

つばくらめ

お前も旅の鳥だわネ

昨日までなにも云はずにゐたけれど  
わたしも旅の

鳥なのヨ

もうわたしや遠いところへ

ゆくんだよ

物干臺の

つばくらめ

今日はわかれだ  
泣かないか

お 艶

お艶が風呂にはいつてゐると

若い男が

だましに来た

小さい聲でだましてゐる

お艶がさぶり湯をかけてやると

男はうろくしてゐたが

裏から

すーつと逃げて行つた

馬は厩で

馬堰棒を

がらんくくと鳴らしてゐる

天の川は北から西へ流れてゐた

旅の鳥

山に春雨

野に茅花

花のかけかは

つばくらめ

去年常陸の

ふるさとの

山に來もした

つばくらめ

雨は降れども

つばくらめ

花に寝もせぬ

旅の鳥

野にも山にも

春の日の

雨は絲より

細く降る

篠 藪

蝸牛よ

黙り腐つた

蝸牛よ

渦を巻いてる蝸牛よ

何が戀しい

篠藪に

さらく

さらと

雨が降る

夢現に

己は暮した

蝸牛よ

己に悲しいコスモスの

花と花とに雨が降る

もう己の

家は最終だ

蝸牛よ



田もいらぬ  
畑もいらぬ  
篠藪に

さらく  
さらと  
雨が降る

萱の花

誰に見せうとて

髪結ふた

西の山には

萱の花

誰に解かそと

帯締めた

東の山にも

萱の花

萱の枯れ葉に

だまされた

お綱さまはと

懸巢啼く

みそさざい

わたしの姉さん

篠藪で

さつさ

お背戸の

鷓鴣

誰にも言はずに

ゐてお呉れ

去年の暮にも

篠藪で

さつさ

お背戸の

鷓鴣

誰にも言はずに

ゐてお呉れ

風に吹かれて

風に吹かれて

そよくと

山の枯葉は

皆落ちた

木曾に木櫃の

實はうれる

かへれ信濃の

旅鳥

茶の樹畑の

豆食べた

鳩は畑の

どこで啼く

荒野

花と云ふ花は咲けども

妻と云ふ

花は咲かない

おお 淋し

荒野の果てに

咲く花は

妻と云はりヨか

おお 淋し

風に吹かれて飛ぶ雲は

荒野の果ての野の果ての

わたしに 何んで

戀しかる

子安貝

渚なみの 渚なみの  
子安貝こやすがひ

波なみ 波なみ  
どんどん  
どんど

子安貝こやすがひ

今日けふから ふたりで  
暮くしませう

お前まへも

わたしも

子安貝こやすがひ

一軒家

姉は 男に

だまされた

野中の一軒家の

きりぎりす

機場に賣られた

妹は

とんがらがん とんがらがん  
暮してる

姉は 男に

だまされた

野中の一軒家の

きりぎりす

青い芒に

降る雨は

ちんちりりん ちんちりりん  
降りました

白露 蟲

かげろふの  
あしたはまたぬ命だと  
たよりは来たが  
どうしよう

ひとつにはまたひとつには  
かすかに白き



花はなでせう

しよんぼりとまたひとつには  
さびしく咲いた

花はなでせう

かなしくもまたふたつには

涙なみだに咲いた

花はなでせう

かげろふの  
絲いとより細ほそき命いのちだと  
たよりは来たが  
どうしよう

雁

今朝も 南へ

下總の  
雁が啼き啼きたちました

さらば さらばと

下總の  
風の吹くのにたちました

親と別れた

故郷の

空を見てゐた雁でせう

旅の身ゆゑに

下總の

風の吹くのにたちました

濡れ乙鳥

逢ひはせぬかよ

十六島で

潮來出島の

ぬれ乙鳥に

潮來出島の

ぬれ乙鳥は

いつも春来て  
秋歸る

空飛ぶ鳥

赤いはお寺の

百日紅

白いは畑の

蕎麥の花

空飛ぶ鳥ゆる

巢が戀し

別れた子ゆるに  
子が戀し

木瓜の花咲く

ふるさとの

國へ歸れば

皆戀し

枯れ山唄

潮來出島の  
五月雨は  
いつの夜の間  
に降るのだろ

枯れて呉れると  
枯れ山の

風は幾日  
吹いただろ

常陸鹿島の  
神山に  
己が涙の  
雨が降れ

土藏の壁

わたしの胸の  
戀の火は  
いつになつたら  
消えるだろ

竈の土は  
樺色の

焔に燃えてをりました

君はたしかに  
夕暮の  
野に咲く花の  
露でした

土藏の壁に  
相合の  
傘にかかれてありました

夢き日

君のたよりの  
来た日から  
かなしい噂がたちました

水に流して呉れろとは  
夢と思への  
謎か知ら

走り書きだが  
假名文字で

「涙」と記してありました

水に流して呉れろとは  
熱い涙の  
ことか知ら

祇園町

友禪の 赤く燃えたつ

祇園町

銀の糸の

雨は斜に降りしきる

澁色の 蛇の目の傘に

降る雨も

上に下にと降りしきる

鴨川の 河原に啼いた

河千鳥

君と別れた路次口に

雨はしきりと降りしきる



お  
絲

雑木林ざもくはやしの

啄木鳥たくぼくとりは

杉すぎの枯れ木かれきを

啄つくいて啼ないた

杉すぎの枯れ木かれきを

啄木鳥たくぼくとりは

無性むしやう やたらに  
啄つくいて啼ないた

掛かけた襪たぶきの

解とけたも知しらず

涙なみだうかべて

お絲いとは見みてた

霜 枯 れ

裏の田圃で  
鳴がゆふべ啼いた

ささげ畑の 暴風の晩も  
君は忍んで 逢ひに来て  
呉れた

裏の田圃で  
鳴がゆふべ啼いた

鳴も田圃も霜枯れだけど  
君は今夜も 逢ひに来て  
呉れよう

螢  
草

垣根の外かきねのそとに  
來ては泣なく  
故郷ふるさとの  
戀こひしい唄うたに聞ききほれて  
垣根かきねの外そとに  
來ては泣なく

下野しもひの 機場はたばに  
しほむ螢草ほたるぐさ  
垣根かきねの外そとに  
故郷ふるさとの  
戀こひしい唄うたを  
聞きいて泣なく

小室の小笹

裏戸覗いて 裏から

歸る

紺の前掛 麻裏草履

あなた一人に

情立てましょと

泣いて別れた 小室の

小笹

裏戸覗いて 裏から

歸る

紺の前掛 麻裏草履

芒の葉

166

「死なば共だ」と  
新吉さんは  
裏のお玉坊と  
畑で泣いた

ウンニヤ 新吉さんは  
小指の先を

細い芒の  
葉で切りました

裏のお玉坊も  
泣きく指を  
共に芒の  
葉で切りました

167

戀の日

春の名残の  
暮るる日に  
紅き花さへ  
惜みたり

夕べ 烟で  
戀人を

待ちしも  
今は昔なり

夏のをはりに  
露草の  
白さ花さへ  
惜みたり

河原の岸で  
戀人と

泣<sup>な</sup>きしも  
今<sup>いま</sup>は昔<sup>むかし</sup>なり

西瓜畑

西瓜畑すいかはたけさ

お月つきさま出でてる

そろりそろりと

お月つきさま出でてる

土つちをたたいたら

どしんこ響ひびいた

姉あねも妹いもうとも

おさらば さらば



旅で暮らせば

旅で暮らせば

茅野の

雨も

さらりさらりと

身にしみる

さらりさらりと

茅野の  
雨は  
さらりさらりと  
身にしみる

沙の數

潮しほがれ濱はまで聞きく唄うたは  
みんな悲かなしい  
唄うたばかり

沙すなの數かずほどかぞへても  
別わかれた人ひとは  
歸かへらない

涙なみだぐましくなつて來きて  
泣なかずに泣なかずに  
ゐられよか

昔の月

お前と逢うた

武蔵野に

青い昔の月が出た

お前も見たる

武蔵野の

畑の中に家が建つ

畑の中の夕雲雀

もうおれは

故郷へ歸るぞよ

歸らぬ人

川の向うで  
水鶏が啼いた

歸りやんせ  
歸りやんせ

月もおぼろに

河原さ出てる

歸りやんせ  
歸りやんせ

きつと忘れて  
ゐるんだよ